

Title	筑波常治著 『日本人の思想』：農本主義の世界
Sub Title	J. Tsukuba : The thought of Japanese people
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.3 (1962. 3) ,p.99- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620315-0099">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620315-0099</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

それには、人類学の領域においてのみならず、社会学その他の隣接諸科学の協力を求めながら、新しい統合研究の一環として推進することが肝要であろう。

ボグト教授が伝統的小社会の現地調査を念頭におきながら展開した論述は、高度の産業社会の一つであるわが国の変動過程の研究にたいしても、原型理論としての基本的意義を失うものではない。原型理論の次の展開は、いつにわれわれの今後の研究活動にかかっているのである。

(十時巖周)

筑波常治著

## 『日本人の思想』

——農本主義の世界——

最近、日本の思想に関する著書がつきつきと出版されるようになった。そのなかで筑波常治氏の『日本人の思想』は型は小著ながら新しい視角からこの問題に接近しようとしている異色ある思想書である。

結論から先というと筑波氏は、日本人の思想とは、とりもなおさず「農本思想」であると考えている。この「農本思想」という角度から日本の思想を見事に切りさばいてみせる。かつて私は筑波氏の「日本農本主義序説」なる論文(『思想の科学』一九六〇年六月号)に接したとき、新しい視角から日本思想史を鮮やかに分析していくその見事さに感動したものであった。

筑波氏は、従来の日本思想史は、外来思想の輸入と挫折のくりかえしの叙述に費されているが、思想史においてもつと大切なことは、外来思想が日本にはいつてから歪められる過程とその原因を追求することではないかという。なぜ外来思想が歪められるかといえ、日本人の世界を根柢において制約している「農」の伝統——農本思想があつて、そこを通過するとき、いかなる外来思想もブリズムを通る光のように屈折するのだ。だからこの農本思想を究明しなにかぎり、本当の日本思想史はつくりだされないと筑波氏は考えるのである。

なぜ日本人のあいだに農本思想が生れてきたのか。この点について、筑波氏はつぎのように説明する。それは日本人は狩りと漁業の段階から牧畜段階を通らずに、一挙に農耕社会を出現させてしまったことに由来する。農耕——殊に稲作は一つの土地にじつとしており、単調な反復作業をすることで生活が可能である。日本人の「お

のれの土地“にたいする病的なまでの執着、または郷土から受ける異常なほどの束縛感、農耕民族たる歴史の中から必然的に生じてきたものにちがいない。この郷土愛精神と土地をすべての中心にすえた封建的農業機構とが結びつき、これがさらに儒教の徳治主義と結合して人格こそあらゆる行為の源泉であるという道徳を生みだした。明治維新後も農本思想は農村に温存されたばかりでなく、逆に都会の人間関係をも規制する道徳として若返ってきた。だから「問題は過去だけにあるのではない。一部の論者たちは、日本の農本主義を、地主あるいは豪農階級のイデオログにすぎないと規定して、戦後の農地改革により階級的基盤を失った以上は、とおからず消えうせるべき運命にあると楽観する。しかし、日本の農本思想はけつしてそのような特定集団だけの独占物ではあるまい。それはむしろ職業としての農業からはなれても、あらゆる日本人の思考の内部に、ガン細胞のように巣くつて増殖をつづけているのではないか」(二二頁)といいきる。

農村に育つた者なら誰でも知っているが、農民たちは人が一尺土を掘るとき一尺五寸掘りさげるのが篤農家だといわれてきている。土を深く掘りおこすことは多少の増産にはなるが、そこには労働の能率の低下という「合理的な労働生産性」の視点は無い。そのかわりに、深く耕すことによつて生ずる苦しみ、そのまま人間とし

ての修養として役立つのだという道徳主義にすりかえられている。この「勤勞」精神は消費生活における「節約」の強制が裏うちされて農本思想の道徳基準となる。勤勞と節約の思想は当然に貧しい生活の中に生れてこなくてはならない。だから農本思想は一面において富裕階級にたいする攻撃の役割もはたしてきている。「働かざる者は食うべからず」「貧しい農民を救え」という思想は農本思想のものであつてマルクス主義だけの専売ではない。戦前よりもより戦後においても衣装をかえて農本思想は健在なのである。

筑波氏はさらに戦後のミチュリーン農法、生活綴方、歌ごえ運動、サークル主義、人生雑誌といったものも実は農本思想の上につかつたものであることをとく。たとえば理科教育も国語教育も、まともに受ける条件をあたらぬ貧乏の子供たちを、もつとも有効に教育する方法として、生活綴方が考案された。あるいは歌ごえ運動にしても、道具も資金も要せず、わずかの余暇をさいておこなえる娯楽であるということが多数の同調者を獲得した原因であつた。「貧しさこそは、ネオ農本主義をそだてた背景にはかならない。それは、日本人の多くが、戦後も貧しいこと、すくなくとも貧しいという意識から脱けだせないでいることの、こよなき証明であるにちがいない」(一九九―二〇〇頁)。「貧しさからの出発が、ネオ農本主義の特色をなす。その手段を採用する人たちは、みずからを貧し

いと規定する立場にたつ。地団研にぞくする学者たちも、ミチューリン運動の農民たちも、生活綴方の教師も生徒も、歌ごえに参加するBGも、けつして自分たちを富裕なる人種とは考えてまい。みずから貧しいと信ずるがゆえに、それらの運動からは、ほかの貧しい人々にたいする同情が生じる。同情とともに、仲間意識が芽ばえる」(二〇〇頁)。この意識は国際的に拡大されると文明国の欧米を憎み、農奴の国であつた中ソに親しみを感ずるようになる。「反米・親ソの旗じるしは、共産党の思想である前に、農本主義の感情であつた」(二〇〇頁)のである。この筑波氏の指摘はきわめて多くの示唆を含んでいると思う。

以上は本書の内容を全般的に紹介したのではなく、筆者の関心度の高い二、三の点についてふれただけである。本書は

#### 序 日本人の思想の源流

##### I 技術主義の功罪

##### II 土とアカデミーのあいだ

##### III 日本思想と進化論

##### IV 農業史を見る眼

##### V 家庭菜園の社会学

##### VI 戦後日本の「ネオ農本主義」

おわりに

#### 紹介と批評

という構成になつている。各論文については筑波氏自身がつぎのようを紹介している。Iは日本の農業技術のうち、ずぬけてそれだけ発達している品種改良の歴史をたどりながら、「技術」にたいする日本人の期待の本質をあきらかにすることを念願とした。IIは日本における農学の成立史をふりかえり、日本の「アカデミズム」の性格の一端を解明しようとした。IIIは日本での進化論の運命をたどりながら、キリスト教あるいはギリシヤの合理主義とまつたく異質の日本人の「自然観」について考えようとした。IVでは農業史の歴史をふりかえり、とくに日本の伝記作家の問題にふれながら、日本人に根づよい「道徳主義」の歴史観の源泉を掘りおこそうとした。Vでは戦中戦後にかけて隆盛をきわめた家庭菜園を手がかりに、それがいかに日本人の「生活」の伝統と結びついたものであつたかを指摘したかつた。VIは、戦後の農本思想の存続をあきらかにしながら、日本人の「実感主義」ないしは「大衆崇拜」のよりどころを追究しようとした(二三頁)。

筑波氏は生物学者であり、すでにその方面の著作もいくつがあるが、日本農業思想史を将来まよめたいという念願をもたれているようである。その将来の目標に向う過程の作業として本書が生れたのである。それは「デッサン」であると筑波氏は述べているが、どの論文をとつてみてもユニークな力作であることは間違いない。従来

の思想史にみられたように、外国におけるオリジナルな思想はこうであつて、それは明治何年頃、誰々によつてわが国に移入され、それがいつどんな事件によつて挫折していつたというものより本書はどれほど興味深いかしない。従来<sup>レ</sup>の思想史はどちらかといへば「思想」という名の墓場の発掘であつた。『日本人の思想』は、たゞ歴史的なものを取り扱つている場合でも、それは今日の、われわれの問題として受けとめることができる。それはなんといつても、借りものでない日本人の思想を追求しているからである。(三一書房 一五〇頁)

(中村勝範)